

太郎と次郎

水野 仙子

一

或る所に二人の兄弟がありました。兄は太郎といひ、弟は次郎といひました。太郎は誠に覺えの悪い鈍い子でしたが、次郎はその反對に覺えがよくて、また敏捷くありました。

或る時お母さんは二人に御用をお言ひつけになつて、

「さあ、二人とも早く行つておいで、道程は丁度同じ位だから、誰が早く御用をたして歸つて来るか、お母さんは其人に御褒美を上げるよ。」と仰しやいました。

二人は出かけました。太郎は一生懸命に脇目もふらずに道を歩きました。何處までも／＼歩きました。

ふと気付いて見ると、太郎はも

う何時の間にか、何處に何の御用たしに行くのか忘れて居ました。そして、ぽかんとしてお家へ歸つて來ました。

けれどもお母さんはちつともお叱りにならないで、

「太郎や、

お前はお砂糖屋にお砂糖

を買ひに

行くのだよ

お前は覺え

が悪い子な

のだからね、ようく忘れないやう

に、道々口の中で繰返し／＼言つ

て行くがいゝよ。」と教へて又出してやりました。

太郎は教へられた通り一生懸命

になつて、

「砂糖屋に砂糖買ひ、砂糖屋に砂

糖買ひ。」と言ひながら歩いて行き



ました。

すると向うの方から歩いて來た

一人の男が、立ち止まつて太郎に

向ひ、

「この邊では、どつちの方に行つたら炭屋がありますか。」と尋ねました。

「炭屋はあつち。」と太郎は指さして答へました。

それから又歩き出しましたが、

どうしませう、太郎は今度は一生

懸命になつて、

「炭屋はあつち、炭屋はあつち。」

と言つて居るのでした。そしてその言葉に連れて炭屋に行つてしま

ひました。

「お呉んなさい、あつちを下さい。」と太郎は炭屋の店先に立つて言ひ

ました。

すると炭屋の主人は、怪訝さう

な顔をして太郎を見ました。

入力者注..

底本は総ルビですが、ふり仮名は一部のみ残しました。

底本.. 讀賣新聞

大正六(1917)年四月十二日朝刊

テキスト入力.. 小林 徹

公開..

平成二十九年十一月二十七日

リンク.. [水野仙子ホームページ](#)